



[史料紹介] 『港の華横浜奇談』

その他のタイトル	Minato no Hana Yokohama Kidan (Flower of Ports, Yokohama, Curious Anecdotes)
著者	宮島 小百合
雑誌名	史泉
巻	117
ページ	20-28
発行年	2013-01-31
URL	http://hdl.handle.net/10112/00023658

『港の華横浜奇談』

宮 島 小百合

は し が き

毎年、四回生は卒業論文の作成に励む。就職活動をしながらの卒業論文作成は、ある時期、彼ら彼女らにとって残酷な時期でもある。それでも十二月まで頑張っていると、思いがけないほど優れた卒業論が生まれることがある。卒業ゼミを担当しているわれら教員一同の共通の思いであろう。したがって、ゼミが違っても卒業論優秀賞にも素直に喜べる。彼ら彼女らにも充実感が残り、卒業式を迎える。毎年、練り帰されるシーンである。

しかし、卒業優秀賞に選ばれるのはわずかに一編。大半は、どれだけ優れ、充実していてもその選に漏れる。それでもそんな多数の卒業論の中に、原史料を頑張って読んだものや、何度も現地に足を運んだ努力賞物がある。パソコンの普及でカラー写真が付けられたり、史料翻刻が付けられるなど、貴重な成果として残しておきたいと思うことがしばしばである。ここに紹介する史料『港の華横浜奇談』は、その一つである。筆者は宮島小百合さんで、卒業論のテーマは「港の華横浜奇談―外国との交流による日本人の常識の変化について―」。

長崎や横浜、あるいは外国との交流を卒業論文のテーマに選ぶ学生は少なくない。貴重な史料の翻刻は、後進のためにもなる。しかも本誌『史泉』は、学部生から院生・卒業生・教員までの幅広い会員を擁している。そこに学生の卒業論の成果が載ることは、学生会員にとっても励みとなるだろう。ということ、史料紹介として掲載することにしたが、翻刻原稿は、関西大学非常勤講師村山弘太郎氏の協力を受けながら宮島さんが作成したものである。残念ながら提出原稿には読み誤りが数か所あったので、その補正は数田の責任で行った。

紹介に当たっては本文を全文示し、挿図として入れられた画像は内容を摘記し、すべて省略した。本史料の原本は図版を含め、早稲田大学図書館のホームページ上で公開されているので容易にみることができ。本文の最初に、丁数を(一)(二)として示した。

『港の華横浜奇談』の作者は菊苑老人とあるが、詳細は不明である。末尾に「董蒙」のために大概を記したのみと謙遜して書くが、内容は充実している。横浜開港に至る経緯から始まり、横浜の居留地と日本人町の様子、異人たちの暮らしぶり、年中行事、馬に乗り牛乳を飲む、犬を飼うなどの習慣、写真や時計などの新奇なもの、黒人や南京人との関係、教会と葬送儀礼など、多岐にわたる。しかも伝聞

でなく、実見しているのでリアリティーがある。偏見が少ないのも注目される。「西洋人は窮理の学のみ」とか、以前は蘭学であったが「いまにいたりては英学ならでは事足らず」といった観察は、一つの文明批評といつていいだろう。

読者諸氏によつて活用されることを期待する。
(數田 貫)

【凡例】

- ・本稿は早稲田大学図書館ホームページ「古典籍総合データベース」において公開されている『横浜奇談』（請求番号ル04 0414 0）を全文翻刻したものである。
- ・挿図は掲載箇所の内容を摘記し、すべて略した。
- ・丁数を文頭に（一）、（二）として示した。
- ・改行は改め、適宜句読点を付した。
- ・異体字、変体仮名は基本的に当用漢字、ひらがな、カタカナに改めた。
- ・正字の一部を当用漢字へと改めた。
- ・振り仮名は一部を残し、大部分は削除した。

美那登能波奈
横濱奇談

錦港堂蔵

(口絵)

アメリカ・オランダ・フランス・オロシヤ・イギリス・ポルトガル・プロイセンの国旗を絵入りで掲げる

(序文)

それ大日本は神の治しめす皇国なれば異国に勝たるが故に国に産するもの一種として益あらざるハなし。況や数百歳の御仁恵ますく、四海に溢る、もて萬国にも仰ぎしたひて頻に通商の事を願ひしかば、終に御免ありて、横浜に港を開かせたまひしにぞ。忽繁栄の地となり、外異の国々萬里の波濤を犯して渡来せしより、我国になき異品奇談も多きを遠程の老幼ハ力及はで、終に見聞せざらんハ遺憾なるべければ、此小冊をあらはして、其形容をしらしめば、長夜の話種ともならんかと、書肆が老婆心を助けて、其概略を記すになん。

菊苑老人誌

見開き挿図三枚〔横浜港繁榮之図〕、日曜の異人男女のパレード、遊女屋に來た異人が遊女の姿の美しさを見て驚く〕

(一) 皇国において 官許ありし通商の義ハ、貨易の品替と事替り、

双方ともに片売片買にして、いづれも現金の通商なれども、その廣大なる事前代未聞にて、一日のうち一萬兩二萬兩あるひハ五萬兩など、数口のうり買ありて、その高下限りなし。すべて品物を渡し候へば、其日のうちに代銀をはらひ、速にらちあく事他所にハよもあらじ。また莫太の洋銀を麻財布などにうちこみて丁稚あるひハ輕子のたくひ、肩にうちのせ、堅横にひとり行するもめづらし。彼洋銀の相場、朝暮にくるふがゆへに、これを活業として世を渡るものも許多あり。世上の両替屋におなじ。俗にドル屋と唱ふる也。また外国より持わたりたる品物ハ波戸場へつミあげ、

(二) それ〴〵御改濟のうへ、品物ハ御割合通りの御運上相納め、其後売買におよぶ也。尤我國の品物とても御あらため義ハ同様なり。外国より渡來する品物ハ織物のたくひ、ギヤマン細工の器物、葉種の類、そのほか品数多けれバ略す。また我國より多分に売わたす品物ハ、生糸・茶・塗ものい・石炭、そのほか数品あり。惣じて何品二よらず、売込の節ハ逸々町会所へとゞけ、御改濟のうへにて館内へ持ちむ事なり。且当地の商人、商館へ出入のときハ、鉦々鑑札を腰に提るなり。無用のものハ立入事を許さざる事嚴重なり。御開港の起原ハ、嘉永七寅年亜墨利加国王より使節を渡して本使ペルリ副使アータムス

(三) 軍船九艘にて入津し、通商の願書を奉り、其後度々入津して願上けるにより、終に 御免許あり。未年六月より通商相始り、當時に至りて市中の繁榮いふばかりなし。町割は碁盤目のごとくにて、御運上所を真中にして東の方ハ異人商館、西のかたハ町々なり。その町名ハ本町通り五丁目まで、海岸通り・南北仲通・弁天通迄、同所坂下町三丁目、太田町ハ八丁目まで、洲干町ハ弁天社の右手なり。当社に安置したてまつるところの弁財天ハ弘法大師の真作にして、江の嶋なる弁財天と同木同作なり。彼嶋の御神ハ六百年のむかしに御開運ましませしに、当社の御神ハやう〴〵今にいたりて御開運なり。

(四) かゝる尊き神仏すら、御開運の遅速あり。いはんや凡夫におおてをや。彼一休禪師の語に因縁の熟するところ遅速あり。桃栗三年柿八年ともふされしも、実におもひやられ、兼好法師が変化の理をしらねバなりといはれしも、いよ〴〵尊き金言ならずや。偕、入船町ハ吉田ばしの手まえなり。駒形町ハ御運上所の東也。芝居ハ北仲通り二丁目にあり。役者ハ江戸表より立者人かはり立かはり來りて、定芝居たゆる間なし。相撲ハ太田町六丁目金毘羅境内にあり。これも四季の興行休むことなし。波戸場ハ御運上所の前なり。異人の波戸場は谷戸ばしの手まへ也。元町ハほり割の向ふ増徳院の

見開き挿図(異国船停泊の図)

(五) 右手なり、すべて町数四十五町なれども家数ハ凡壹万にもおおよべき歟。僅五ヶ年にも満ざるにかく繁花の勝地となりし事、全く

御仁惠の厚きがゆへなり。仰でもあふぐべきハ御国恩なり。また家数に對してハ人民の多き事、湯屋・髪結床をもつてもしるべし。早朝より夜にいたるまで群集なす事、目をおどろかさすばかり也。渡船場ハ本町一丁めの河岸なり。此所にも諸荷物御改所御関門あり。此所より出船して神奈川宮の河岸と申所へ着なり。船賃ハ疍人まへ四十八文なり。その海上眺望の絶景他に類なし。西は富士を正面に見わたり、右にハ秩父甲相の山々つらなり。左にハ箱根

(六) 天城山、近くハ鎌倉金沢辺を手に取ごとく、東ハ房総加納山・鋸山を遠見にわたり、目前に見る魚漁の活業にハ、名におふ神奈川の勝景浦島寺・龍燈の松・松山候の炮台、南にハ横浜の絶景停泊の異船ハ青黄赤の旗をなびかし、異人館の遠見ハさらに我國とハおもハれず、亜国のハシントン、英国ロンドンの港へいたりしも、かくやあらんとおもハれける商家繁昌のありさま、民のかまどハにぎハひの御製をさへ思ひ出らる。実に景色ハ一ツとして足らずといふ事なし。かゝるありかたき御代に住て、此勝地を見ざらんハ遺憾なるべし。海道往來の旅客かならず一覽ありて旅情をなくさめ

(七) 玉ふべし。勿論横浜表ハ、所々の入口に御関門ならびに諸荷物御あらため所ありて、御取締向、はなはた嚴重なり。武家方ハいふにおよばず、他国の諸民見物などにまいり候とも、帯刀ハ決して相ならず、縦令短刀たりともきびしく御禁制なり。御掛り御役人様方之外にハ帯刀したるもの一人もあらず。よくよく心得ざれば不都合なる事あるべし。又、夜中無提灯にて往來する事、是また御制禁なるが故に、

盲人といへとも提ちんを持あるくなり。是等ハ他国になき義なるべし。偕、陸地ハ西の出口吉田ばし、御関門より野毛橋にいたり、左の方に御固場の御陣屋ならびに金沢道あり。

(八) すべて此辺を野毛町といふ也。それより切通し、右のかたハ御奉行様の御屋敷、左のかたハ程ヶ谷道なり。左右に御役宅立ならべり。戸部町をすぐれば、石崎御関門なり。つゝひて平沼橋新田間ばしより東海道神奈川の入口へ出る。このあいだ行程甚里なり。港崎遊女町ハ市中より南の方に波戸場よりの見通し也。衣紋坂見返り柳あり。堤手つゞきを俗に吉原道といふ。此道筋のはん昌なる事、江戸人形町通り、浪花順慶町にも劣らず。左右の唐物店ハ旅客の目をやしなひ、茶屋のかけ行燈ハ月の光りをうばふ。大門口を往かふ送りむかひの箱でうちんハ堂の飛びかふより猶しげく、仲の町の

見開き挿図(異人遠近の景色を写真鏡でみる)

(九) 桜ハ艶々として娼妓に色をあらそふ。すべて四季おりりの美花絶る間なし。岩亀楼の家造りハ蜃気楼のごとくにして、あたかも龍界にひとしく、文月の燈籠、葉月の俄踊、もんだいの賑ひ、目をおどろかし、素見ぞめきハ和人異人打まじりて、昼夜を分ず、娼妓の道中ハ綺羅をかざりて、唐物和物を好ミのま、に取まじへ、さし飾り、着かざりたる粧ひ天女のおまくだりしやと疑がはる。楼上にハ洋銀の花を咲ミたしめ、坐敷にハ分銀の実を時ちらせり。かゝる全盛のありさま、三都の郭にもおさくおとるまじと思ける。されバひとたび此

廓に遊べるものハ魂有頂天にのほり、更に家に帰るを忘るべし。

(十) また異人屋敷にハ士官と商人とあり。士官の分ハミニストル・コンシユルあるハ通辯官またハ船将抔とありて、銘々彼国の旗號をおしたてたり。商館にハその旗なれども、商用の看板らしき旗あり。いづれも屋敷の造り方ハ壁にハ尺石を積みかさね、障子ハギヤマにて、張間毎のしきものハ五疊じき、あるハ十疊敷等、いづれも忝枚織にて、色々の模様あり。その美しき事、美花を布ならべたるごとし。冬向にいたれば一ト間毎に堅炭、またハ石炭などを沢山に起し、その煙りハ銅桶を以て、家根或ハ壁などへ穴をあけ、その桶より洩せば、天井壁なども少しもふすばらず。

(十一) あた、かき事三四月頃の如し。間毎に我國の額堂のごとく、ギヤマン絵の額をかけつらねたり。その美麗なる事、またたくひなし。夜分にいたれば燈台にギヤマンの上覆をかくれバ、その明るき事、毛一筋をも見あやまつ事なし。いづれも屋敷の門のうへにハギヤマンにて製造なしたる行燈かごときものあり。依て門の内外とも白昼に異らず、実に眼覚しきことどもなり。扱、異人朝暮の行状ハまづ朝五ツ半時頃四ツ時頃に目を覚し、すぐに入湯するなり。その湯のぬるき事日なた水のごとし。中にハ暑寒ともに水ばかり遣ふものもあり。夫より常に懸置ところの姿見

(十二) 鏡丈四尺位なりにむかひ、うがい手水をつかひ、髪を直し、シヤボンあかをとるもの、またハ匂ひの水をもつて薄化粧などいたし。夫

より服を着替る也。何れも黒羅紗にて、その地合のよき事革のごとし。又、身奇麗なる事、我國の人に替る事なし。次に食事におよぶ。麦粉にて製したるパンといふものを食す。其外牛肉豚肉果物等なり。酒は種類おほけれども、いづれも多分に飲ても深く酔事なし。これハ我國の酒とハ替り、穀類にあらずして、らんひきにて果物よりとりたる酒なれば、氣ハ強けれども、醒る事ハいたつてはやし。食事ハ朝夕二度なり。煙草ハいづれも好にて少しの間も

見開き挿図(異人館の内小兒の遊ぶ図)

(十三) はなす事なし。されども、我國のたばこと違ひ、つよき事はなハだし。我國のごとく内へ引て吸ときハ目のまハる程なり。彼等ハふかすばかりにて、吸こむ事ハなし。おりく唾をはくなり。これハ常にたばこをふかし唾をはけハ、悪氣を吐出す故に無病なりとぞ。さて又異人の馬に乗る事ハ小兒の頃より、男女ともに乗習ふなり。勿論、流義など、いふ事ハ更になく、只いつとなく乗馴自然と達者にのり、覚るゆへ、その駈引自在なり。あるハ血氣運動のたねにとて、用なき時とても館内市中をも歩行いたす事もあり。我國のもの、いたさぬ事なり。又異人のうちにて旅

(十四) 籠屋をするものあり。これハ家作を一ト間く部に屋のごとくに造りて、渡来のもの上陸の節、たよりすくなきもの、此はたごやへ止宿する也。もつとも、旅宿料一宿分洋銀三枚我國の銀にして一兩三分なり、中食ハドル忝枚なり。我國の旅籠料とハ格外の高料なり。其

うちに五十疊敷ぐらゐとも見ゆる大坐敷ありて、真中に長サ三間ばかり、巾式間ほどの机のやうなるものあり。廻りのふち高さ式寸ほどにて、其すミトに穴あり。其盤面に式寸五分ぐらゐの玉をおき、その玉を相手と替りト棒を以て突バ、我玉と相手の玉とあたり合、あたり合、その玉穴に入るの次第にて勝と見へたり、入ざるハ

(十五) 負なるべし。その手練の妙なる事実におどろくべきの一ツなり。此遊びハ我國の穴一とやらんに似よりたり。そのかたはらに洋銀を二百枚、又ハ五百枚千枚も積置て、賭とするなり。聖人の世に投壺の遊びもあれば、これらのためしにならふものか。惣て、間毎の奇麗なる事ハ筆に尽しがたし。また彼国にハゾンダフといふ事あり。此ゾンといふハ洋語の天なり。ダフとは幾日といふ日の事也。我國の七曜のうち日曜日なり。八日めくにあたる此日ハ業用バ勿論何事をもせずして、たゞ遊びくらすなり。船々にてハ種々の旗をあぐるなり。我國の節句祝ひ日などの如し。

(十六) 七夕まつりなどのごとく、天を祭るの意ならんか。日待なんどの類なるべし。彼国の船ハ軍船と商船と二様あり。軍船ハ人数三百人位より五百人六百人も乗組、三階四階にも造る。士官の部屋ハトモの方、下部の分ハ表のかたに在り。此下部の事を彼国にてハ、マドロスと唱ふ。船の大きさハ小なるにても、三拾間ぐらゐあり。大なるにいたりてハ、五十間より六十間其餘なるもあり。其美麗嚴重に製造したる事、言語に述べがたし。蒸気船といふハ、車を仕かけて、何風にも構はず、思ふかたへ、自在二走る也。これハ外車・内車とありて、

車の数十も十二もあり。元車よりそれのくるまへ

見開き挿図(黒人が遠眼鏡で諸所の景色を見る図)

(十七) 廻りうつり、夫より水掻車へ移るなり。其元車のはたらくハ石炭といふものを数千斤たきて湯を涌せバ、其湯気のいきまひにて、車廻り出す也。たとへバ、鉄瓶に入たる湯のたぎるにしたがひい、重き鉄蓋のおどり出すにひとしとぞ。此工夫を發明せしハ西洋にても、四、五十年以来の事となん。いづれも、磨きの鉄にてきらびやかなる事、日に映じて、まばゆきほど也。柱ハいづれも三本ありて、はしる時ハ帆を十も二十も懸る。其形、海上に山の浮べるがごとし。港を出入する毎に大砲を多く発つ。これハ入津のときハ無事にて着船したる祝ひ、出帆のせつハ首途の祝ひなり。総て何事にも

(十八) 鉄砲をもつて合図とす。其音大山の崩る、かとおもふばかりにて、耳なれぬものハ驚くもむべなり。商船ハ乗組の人数二、三十人ぐらゐにて、尤商用懸引の模様によりてハ、蒸気船にて当港より南京の港へ日数十五、六日にて、往返す。此早便実に駭嘆のいたりなり。パツテイラといふハ、我國にいふ小船なり。これにハ木口をすこしも遣はず、残らず銅鉄にて製造せしもあり。譬へバ、銅盤を水上に浮べたるにおなじ。また異人おりく上陸して御埋立の広場にて訓練する事あり。其人数凡八百人位又ハ千人余もあり。備へハ五行七行にて、その一行は式拾五人、あるハ三拾人程なり。堅横自在に

(十九) 備を交る事もつとも速なり。一行に壹人ツ、の色替りの服を着したるもの三尺位の釦のぬき身を持ち、その一行に長たり。また其上に壹人の指揮するものありて、彼人数一致して壹人の手足を遣ふがごとく運転す。服は組々ニて白きも赤きもあり。いつれも釦つき鉄炮を持、時として空炮を発する事もあり。また彼空地へ馬場を補理ありて、おりく乗馬をなす。其日の服ハ平日とハ違ひ、思ひく派手やかなる装して三人五人ぐらいツ、競馬をいたすを、同士の見物仲間にて洋銀を百枚あるひハ五百枚など、賭て勝負をなし、楽しむとなり。都て西洋人は究理の

(二十) 学のミにして、我国のごとく風雅風韻優美なる楽ミ事ハいまだ露ばかりも見聞し事なし。異人は常に根付時計を懐中して、しばらくも身を離さず、その時計ハ丸さ差渡し壹寸五分、またハ式寸位もあり。其うちの細工密なる事、画にもか、れず、言葉にも述がたし。價は五両なるも十両なるもあり。此品ハ日用便利の為にする也。たとへバ明日何時に面談におよぶべしと約束し、その刻限にいたらんとすれば、かならず帰宅して待受る也。彼ものも自己が時計を見て、其刻限にハかならず出行て、面会におよぶなり。その外の事ニ付ても其許ハ何時に来玉へ、

(二十一) またハ何時に参向すべし。何時にハ留守なりなど、いふ事に用ゆ。至て、調法にて便利なるべし。また写真鏡という一種の奇物あり。これハ、人は勿論地形遠景などまで、其鏡に移せば、其ものの形、色合まで少しも違はず、微細にギヤマン鏡へ留りて、更に消る事

なき奇妙の工夫也。されバ、人を移す時ハ、その容躰の言ぬばかり也。我国の人も在生の内に絵師に命じて、我画像を写し、懸物などにして子孫に伝へなどする輩もあれば、それらにハ此写真鏡を用ひなバ、いささかも違なくして可なるべし。價はギヤマンの大小によりて、式分位なるも壹両式両なるも

(二十二) あり。此事、今にてハ当地弁天通り五丁目に住する桜田蓮杖といふもの其伝を覚え、業ひにいたしぬるが、異人の仕方と少しも違はず、價ハ却て異人の方よりハよほど下直に出来るなれば、若右の画像などの望ある人々ハ、彼ものへ命ぜられバ、便利ならんか。俗亦彼国の婦人もあまた渡來いたし居けるが、いづれも細面にて瘦形チなる美婦人也。両の耳へハ金銀瑠璃珊瑚など種々にかざり、冠ものをはじめ、そのよそほひはなハ美麗にて、あたかも天女の天降しにやと疑る。彼に羽衣を着さしめて三保の松原

見開き挿図(本町北横町より海岸西波止場までの景色)

(二十三) に詠めたき風情なり。また馬に乗る事、男子にもおとるまじく見ゆ。されども彼国の風なるや、嫉妬のふかき事、我国の婦人に十倍せり。さる故に、密夫をするなど、いふ事ハ怪我にもなきよし。貞操を厚くまもるにやあらん。夫婦の中、至而睦しきさま、表にあらはして更に隠す事なし。道を行にも手をひきあふてあゆめるハ、鴛鴦のつがひのごとし。実直厚き躰も見ゆ。いハゆる隠れたるより、あらハ、ハなしの意にかよひて、おもしろし。又、異人の小児出産の

節ハ更に湯水を遣ハせず、産毛をも剃る事なし。只、幾度も拭とりて取揚る也。其のち

(二十四) 母の乳ハ吞せず、牛の生乳にて養育る事、彼国の風俗なりとぞ。それより三、四才におよべバ、常の遊びに大なる樹の枝ハ細綱を結びさげ、その真中へ尻を居、両手にて左右の綱を掴ませ、うしろよりこれを突すれば、その突たる勢ひにて、三間も五間も前のかたへとび上り、又戻るはずミに後のかたへ飛あがるなり。右のたぐひを毎日の遊戯とせり。側に見るものすら、目のまはるほどなり。これハ、大洋を乗船するとき、船に酔ざるためにすと也。此頃よりして、馬にも乗せ連あるく故に、馬に乗る事ハ自然に得るならん。総て究理する風土なれハ、無益の

(二十五) 事は好まぬとかや。こ、におかしきハ、異人の妾となりし女をさしてラシヤメンと唱るなり。此名を負し元といふは、異人彼国より連わたりしラシヤメンといふ獸あり。其性、素直にして、よく人に馴したしむものなり。船中にてマドロスども下官下部をいふ煩惱きざしたるとき、此獸をとらへておかす事ありとぞ。此故に、異人に犯さるゝの義よりして、ラシヤメンといひならせしも理なり。諺にいふ狐にコンカイ、馬に止動の誤りにも似よりて、今に至りてハ改めがたきもいとおかし。また、彼国より犬をも連わたりて、飼付おく也。其犬によりてハ、價ドル三拾枚、またハ五十枚も出して買

(二十六) 取とぞ。この犬、我國の犬とちがひ、始終その飼主につき

したがひて、何所までも行なり。その主、途中にて求めたる品もの、風呂しき包などを啜へて附あるく。此故に飼主の愛する事はなハだし。萬一、途中などにてはぐれたるときハ、子をうしなひたる親のごとく、草木をわけて尋出さんとおもふ。顔色、只ならず見ゆ。毎日食事などの節も我側に引付置、わが喰さしの品を引付けて与ふるさま、親子兄弟のごとし。つねく身奇麗にするにも、似合ざる事なり。且、当地の人など、異国の犬をバカメといふ事と心得、異犬を見てはカメくとよぶものあれども、

(二十七) 左にハあらず、彼方にて都て目下のものを呼まねくの英語にて犬の物名にハあらずとぞ。扱また、南京人は、西洋人の奉公人にてあまた渡来し居るなれども、元彼国は聖人出現の地端なるゆへ、定めて風雅風韻もあらんと思ひしに、却て西洋人よりもさがしきのミにて、更に好まじき所なし。又黒人と唱ふる異人も多く、渡来してあり。これハ、アラビヤ国の出産にて、男女ともに色酷だ黒し。たとへていはゞ鳥のごとく、爪先までも黒し。生得愚昧にてその所為、禽獸にちかし。その以前ハ、西洋人彼をして牛馬同様に取扱ひ、売買に

(二十八) いたし、召つかひたる処、そのうちに少しかしきもの出きたりて、大ひに立腹なし、我々とても同じく天地間の人なり。しかるを、牛馬のごとく売買にする事あらんや。給銀にて取きハめたらんにハ雇わるべし、と申二付、それよりのち、當時にいたりてハ、皆通例の奉公振になりしとなり。また異人の寺をバ天守堂と唱ふとぞ。異

人死去したる時ハ、同士のもの集まりて、葬式らしき事をなす。其節ハ、服も平日とハちがひ、殊の外立派にせり。其側に警衛ともおぼしきものども、釦つき鉄砲をたづさへたる。その行列見事なり。夫より引導らしき

(二十九) (上部に天守堂の図) 事終りて墓所へゆき、寝棺のま、埋める事なり。その上にて鉄砲を發する事、数度なり。墓所ハ元村増徳院といふ真言寺なり。墓じるしハ異形にて西洋人・南京人とも彼地にあり。法事の節もかの天守堂に集りて、右同やうになす。又、ゾンダフくハ參詣とおぼしく、異人等あつまりて

(三十) 我國の説法談義やうの事を聴聞いたすとすなり。且、彼寺に出家らしきものあり。されども有髮にて肉食妻帯し、俗に替る事なし。尤、服ハ筒袖なれども、ながき服にて裾をひきずる程なり。服の色ハ黒なり。また彼國の横文字ハ、其数二十六字なり。それに数の字十字を合せて、三十六字ある也。我國にて以前までハ、蘭学のミをせしなれども、當時にいたりてハ、英学ならでハ事足らず。これ英学ハ萬國へ通ずるが故なり。学に志ある人々ハ、英を学ぶこそ便利ならん。アメリカも英に同じ。近頃英語箋或ハ和英商話杯という彼國の

(三十一) 言葉を書たる書もあれば、是等をも閱し玉へ

(つぎにアルファベット26文字と1から10の数字を載せるが、略す)

○外国人 商館 番附并人名 (一番から10番までを記すが、略す)

(三十二) 此外、異事奇説すこぶる多しといへども、元來、童蒙のために著す書なるをもて、只其大概をあらハし、微細の事にいたりてハ悉くはぶきて、記さず。閱人よろしく察知し玉ハん事を希うのミ。

港の華横濱奇談終

勝俣氏旧蔵書

(関西大学文学部卒業生)